2022 Newsletter *SY MAYONA II*

ニュースレター1 出航！

ボルドーのメドック港で 4 月 1 日の初乗り、3 日から昨日まで港から港へのセーリング、今 Douarnenez で小休憩中だ。
1 日は、我々のヨットの前オーナーに説明を受けながら、が、風速 30 メーターでの出航はさすがに　きつい。これは私には無理だと少々困惑していたが、ルカス曰く、この風速では普通は出航しないからとなだめられる。
2 日にセーリング仲間のティスがスイスから到着し、いよいよ準備万端、翌日から海生活の始まりだ。
4 月のブルターニュは寒い、ましてや　例年よりも気温が低いらしい。
港での朝は　クロワッサンとカフェオレで。誰かが朝　パン屋へ。
そして身支度、これが大仕事だ。下着以外に　上半身 6 枚、下半身 5 枚の重ね着、帽子にサングラス、手袋、そして長靴、結構な重量だし　すでに疲れる。しかし　のんびりするわけにはいかず、すぐに　ザイルをほどいたり、フェンダー(船を防備する浮輪)を外したり、帆が上がるまで　バタバタと忙しい。
帆が上がれば　少々のんびりと　風を避けて波と空を眺める。
昼ごはんは　簡単ながらも、船上で。パスタを茹でたり、サラダを作ったり。傾いた船内で、体をどこかに固定しながら細心の注意を払って料理する。
ガスコンロは固定されておらず、船の傾きに関係なく水平を保っている。
午後は　風次第だが　波と空を眺めながら　過ぎていく。
毎日　大きな変化はないが、空と風はさまざま、海の色もいつも異なる。
どの港もそれぞれ異なり、美味しいレストランを探して　夕食を取るのは　本当に嬉しいことだ。
その後は疲れ切って　あっという間に寝入っている。

4 月 3 日の到着地は　ラ･ロシェルだ。

ここは　何度か来た町。
2008 年、ここから近いところで　2 週間　フランス語のレッスンを受けたことがある。
そして　この 2 年半　ずっと我々の船を探す旅の間、ここの港を訪れた。岸壁からの海の眺めしか知らなかったが、今回は海から港を眺めることができる。
去年乗った観覧車が目に入ってくる。
季節外れで旅行者は少ないが、それでも海に面したレストラン、バーでは　人々が寛いでいる。
船に必要なヤカン、魔法瓶を購入。だんだん物がそろっていく。
ルカスは　早めに定年退職をし、世界一周航海をするのが長年の夢だった。
ましてや　私は 4 歳年上、今　始めなければ　体力的に無理なのではと　ルカスの仕事上のタイミングも計り、決行した。
去年 11 月から　5 ヶ月間の筋肉トレーニングも週 4 回こなした。
この体力、気力がいつまで続くかわからないが、楽しめるうちは　目一杯楽しむつもりだ。

ニュースレター3、4 月 15 日

„ voit Sein, voit sa fin“
セイン島を見るものは、その身を滅ぼす

4 月 13 日、Baie d‘Audierne から　Douarnenez へ向かう。
翌日の潮の満ち引きの最適な時間に出航するため、Audierne 湾では　ブイ(浮き)にヨットを固定し　停泊する。(ここは停泊できる港がない。)
La Pointe du Raz という岬を越えなければならない。
ここは船の墓場と呼ばれる場所で　岬の左手に遠く　セイン島が見られる。
海流が強く、風速との兼ね合いが難しい場所だ。増してや　霧も頻繁に発生するらしい。
レーダーの普及していなかった 1960 年代までは、多くの船がここで沈んでいる。
今でも　沈んだ船の宝物探しのために潜水する人々がいる。
朝　9 時過ぎに出発した我々は　曇り空の下、順調に岬へ向かう。霧はない。
雲の隙間から日が差し、セイン島の白い家々が光って見える。
岬の周りは　大小の岩山があちこちに見られる。
無事　岬を越え、後は　のんびりと Douarnenez へ。

ニュースレター4 、4 月 17 日

4 月 15 日　なんと良い日だ。
Douarnenez に家を持つ長年のスイス人友達ウルスが、預けていた私の電子ピアノをヨットに持ってきてくれた。
長い船旅に付き合う私の必要条件は　『ピアノ』があること。去年末、好みの電子ピアノを購入し、定期的に Douarnenez に行くウルスに託したのだ。
久々に鍵盤に触れるのは　シアワセだ。
夜、ウルス達と　港近くのバーで　テイクアウトしたピッツァと、ボルドーワインを楽しむ。

真夜中近く、ヨットに戻るため桟橋を渡っていると、夜釣り帰りの男性に声をかけられる。釣った鯖が欲しいかと。
鯖の味噌煮のために味噌は持参しており、ちょうど生姜も買ったところなのだ。断る理由はないが、生魚を狭い船室の冷蔵庫に入れておくのも難だ、、、、しばし、、、が断るわけにはいかない。
「いくら？」と聞くと　何匹でも好きなだけ　タダでとのこと。
持ち帰る袋もなく、両手に持てる二匹をいただく。右手と左手に一匹づつ掴み　そそくさと船に。そして、即　料理にかかる。たいして難しい料理ではないので　翌日　食するのを楽しみに　ベッドへ。
本当に　なんて良い日だったのか！

ニュースレター5、4 月 23 日

まだ　ブルターニュにいる。
朝　9 時半、Aber Ildut から　L‘aber Wrac‘h に向かう。20 日にヨットに到着したダニエルとともに。
強い北風に　行きたい方向にまっすぐ進めない。
波が高い。
波(海流 3 ノット)を超えながら強風(30 ノット)に逆らって進むのは　本当にきつい。
波飛沫が思わぬ方向から飛び込んでくる。
船上に座っているのはまだマシだが、途中でやはりトイレに行かねばならない。
船内で、着込んだ上着 2 枚、オーバーオールのズボンを脱ぎ、トイレへ。その間　ヨットは揺れに揺れている。便器に座っても　必ずどこかを手で支えている。
事を終え、トイレはフタをしてポンプを最低３０回上げ下げし、流す。
そしてまた服を着込み　船上へ。
この時点で　船酔いしている。
我慢ならず　船縁で吐く。
その後は　水平線をジッと眺め、酔いを覚ます。

が、水平線にかぶさるように大波が来る。
この海路は　岩山が多い。ルカスは　i-phon 片手に GPS で常に岩を確認しながら舵を取っている。
不自然な姿勢で体を支えているため　背中が痛くなってくる。
こんな中、帆の向きを変えるための作業もせねばならず、ヘトヘトだ。
夕方　6 時半に港に着いた時の安堵は　言葉にならない、、、、、、。
港で　熱いシャワーを浴びられるのはありがたい事だ。

ニュースレター6、4 月 29 日

28 日、Lézardrieux から　サンマロまで　9 時間、帆を上げ、エンジンを掛け走り続ける。
途中、海流の強いところでそれに乗って　速度 8.6 まで上がる。
揺れはそれほど強くなく、ただただ走り続ける。
こういう時は　本を読む。
ブルターニュに行くと伝えた友人が薦めてくれた「デュパン刑事シリーズ」を旅の初めから読み続けている。

Jean-Luc Bannalec 著のこのシリーズ物は　テレビドラマ化されており　それなりに有名らしい。コンカルノ Concarneau 在で、ブルターニュ地方が舞台。
画家ゴーギャンが一時住んでいた村での殺人、海岸に流れ着いた死体、センイ島での女性死体などなど、もちろん殺人事件の捜査の話だ。
が、その背景にブルターニュの歴史が克明に書かれており、興味深い。
コーヒー中毒で胃を悪くしているデュパンが　その治療に勧められたのが生牡蠣を食すること、パリでは 2 倍の値段だと舌鼓を打つロブスター、そして仕事疲れを癒す　馴染みのレストランでの夜遅い夕飯は　アントルコートとポテトフライと、ブルターニュの美味しいものが羅列されている。
パリから来た刑事と 3 年以上経っても言われ続け、他国人扱いされている、女性関係はちょっとかわいそうなキャラクターだが、有能だ。
荒海での船が苦手なデュパンに　それもそうだろうと　しっかり納得する。
船旅の良き道連れとなっている。

写真はテレビドラマで撮影されたコンカルノ Concarneau のレストラン。

ニュースレター7、5 月 3 日

4 月 21 日、1 週間滞在した Douarnenez から出航、16:45　Aber Ildut に到着する。
ちょうど同じ頃　港に入ってきたボートは　地元の魚釣りの二人連れ。
「たくさん釣れましたか？」と　声をかけると、「これを見てご覧。」
袋の中は　大きな魚がいっぱい、そして蟹も何匹かいる。
そして　これを持って行けと、一匹！
「魚の名前は？」　「Lieu」
スープ煮にしてもいいし、生でもだいじょうぶと説明される。
後で調べると　Lieu jaune 、ドイツ語でポラック、鱈の一種のよう。
ならば夕飯は　刺身と寿司だ。
桟橋で　水を流しながら　三枚おろしに。
せっかくスイスから持ってきた三徳包丁だが　魚を処理するには　鈍すぎる。
必死でおろして、一部　マリネしてサラダと　刺身にする。
頭はすまし汁、残りはフライパンで焼いておいた。
寿司飯を作り　簡単ながらも　寿司を味わう。
淡白な味だが　美味しい。
やはり　もっとマシな包丁を買おうと決心した。

ュースレター8、5 月 6 日

サンマロ滞在も 1 週間となった。
すっかり　ここで生活している気分だ。

船の真横に　町の外壁が見える。桟橋は反対側なので港をぐるっと一回りして　サンマロの町に入る。

町中に　パン屋、小さなスーパー、コインランドリーがあり、日常に必要なものは結構簡単に手に入る。
金曜日の今日は　週２回(火、金) 開く　フィッシュマーケットへ。
以前　旅行で訪れた時は　自分で料理できなくて残念だったが、今は　好きなものを好きに料理できる。
ヒラメ(例のデュパン刑事が　美味しいヒラメ料理を食べ損ねたという場面があり、どうしても食べたくなったため。)、帆立貝、マグロの切り身を買う。
野菜も新鮮で美味しそう。

ルカスは　船の修理や改装で大忙し。備品を手に入れるため　キックボードで走り回っている。
船の先頭のプロペラが作動しなくなったため、詳細は　私には全く不明だが、もう少し時間がかかりそうだ。
船室に降りる階段の手すりも　私のサイズに変えてもらった。これで　大波が来た時も安心だ。
ご近所の船が入れ替わるのも変化があって楽しい。
日々、暖かくなってきており　これも本当に嬉しい。

ニュースレター9、5 月 9 日

牡蠣で有名な Cancale へ行ってきた。
一度　サンマロのレストランで　Cancale 産の牡蠣を食べたら　これがものすごく美味しかった。この機に　行くしかない。
サンマロの駅からバスで 30 分ぐらいのところだ。ヨットのための港がないので半日　遠出した。
町の中心でバスを降り、海岸まで坂道を降りていく。
遠方に　モン・サン・ミシェルが見える。
海岸沿いに　牡蠣マーケット(屋台)が並んでいる。その場で　殻を開けてくれ、レモンを添えてくれる。
そばで　軽トラックで飲み物(ワイン)も売っている。
海岸沿いの階段に座って　皆が　牡蠣を食べている。
我々も倣って　食べた後の殻は　そのまま　海岸に投げ捨てる。
これは　福を呼ぶのだそうだ。
真に新鮮な牡蠣、普通のよりも身が厚いようだ。
今日　初めて　風が暖かい。
上着を脱いだのは初めてだ。
明日からの航海、少しは暖かくなるのを心底　祈る。

ニュースレター10、5 月 10 日

ショゼ諸島　îles Chausey の　グラン島近くのブイに船を着ける。
サンマロを午後 1 時半に出発し、西風と共に走る。
初めて　重ね着から解放され、暖かい風と　燦々の太陽の光を浴びながらの　順調な船足だ。
20 マイル離れた　モン・サン・ミシェルをずっと右手に見ながら　ショゼ諸島に向かう。
ブルターニュから離れ　ここはノルマンディー地方となる。

365 島からなると言われるショゼ諸島だが、満潮時には　25 島となり、満干の差が歴然だ。
グラン島のみ　定住者がおり、冬場は　10 人ほどしかいないが、夏場は 20 万人近くの観光客の来訪によって島の人口は激増する。

この地の花崗岩は　11 世紀初めからモン・サン・ミシェル修道院の建築に使用されている。

夕日に照らされて　海上の岩山の陰は厳しくも美しい様を見せる。

ヨットのブイのある位置を間違え　遠回りしたので、到着は　20:45 とすっかり遅くはなったが、まだ　暖かく、船上でのアペリティフは　最高だった。
実は　今日が初めての、ルカスと二人きりのセーリングだった。

ニュースレター11、5 月 16 日

5 月 12 日、チャンネル諸島の　イギリス王室属領ジャージー島へ。
島の経済はタックス・ヘイヴンで支えられており、多くの会社が島にペーパー・カンパニーを置いている。
船の国旗をフランスのからイギリスに替える。
雰囲気は　正にイギリス。
50 の銀行があるようで、夕方　街のバーでは　背広にネクタイ姿の人々がビールを片手に談じている。
当然　美味しいレストランもたくさんあるようだ。
適当に選んだレストランだが、「牡蠣の天ぷら」と称するものは　天ぷらには程遠いが　唐揚げっぽく、「ゆず入り」と称されたソースもおしゃれに盛られて　許容内。
メインの魚のソースは　味噌入りだった。

13 日、隣の島　ガンジー島へ。
この島を舞台にした『**ガーンジー島の読書会の秘密**』(*The Guernsey Literary and Potato Peel Pie Society*）2018 年のイギリス・フランスの映画を、以前観ていた。
第二次世界大戦時、ここはドイツ軍の占領下にあり、戦争に翻弄された人々の過去を　ヒロインのロンドンからやってきたジュリエットが紐解いていくという内容だ。
風景も美しいなという朧げな記憶しかなかったが、船で到着したジュリエットは　ここにいたのだと、我々の船からの眺めも特別に感じる。

ビクトル　ユーゴーはここで　「ああ無情」を完成させている。
翌日　島一周バス　1 時間半を　楽しんだ。

15 日　オルダニー島（Alderney）へ。
小さな島だが　ゆっくりと散歩し、のんびり過ごす。
明日は　またフランスへ。
写真はガンジー島の波止場

ニュースレター12、5 月 22 日

5 月 17 日　7:30 (イギリス時間 6:30) Adlerney から出航。
海流に乗って　最高 11.4 ノットで　順調に　11:30 シェルブールに到着した。
船を着ける場所に　戸惑い、フェンダーを船の右側、左側と何度も付け替え、クタクタだ。ルカスはハンドル操作に集中しているため　私一人が　船上を飛び回ることになる。知らぬ間に体じゅうあちこち　青あざだらけだ。
やっと　安定した場所に到着する。

シェルブールは「シェルブールの雨傘」で　名前は有名だ。この映画(ミュージカル)では　アルジェリア戦争で引き裂かれた恋人同士の話だが、第二次世界大戦のノルマンディー上陸作戦でも重要な基地だ。
多くの港町が　戦争中は悲惨な目に遭っているのをこの航海中　散々知ることになる。時々読む新聞のウクライナ状況を顧みて　つくづく　人は学ばないものと暗澹となる。

午後、買い物へ、やっと掃除機(小型)購入する。
掃除、洗濯、ルカスは船の修理と　四日間のシェルブール滞在はあっという間に終わる。
木曜日の夜、港のカフェーで　ライブのコンサートが催され、船内まで聴こえてくる心地よい音楽に和む。

ニュースレター13、5 月 29 日

5 月 24 日、晴天の中、ノルマンディーの石灰質の断崖が続く海岸を眺めながら　走りに走る。

怪盗ルパンシリーズの「奇巌城」の舞台となったエトルタ海岸を　この辺かと眺めながら。アーチ状の「アヴァルの門」の隣に円錐型の「針岩」があり、これが「奇巌城」なのだ。
遠目に　はっきりとは見えないが　延々と続く白っぽい岸壁が　日に照らされて素晴らしく美しい。
子供の頃に熱中して読んだルパン、詳細は忘れているが　また読んでみるのもおもしろいかと。
クロード・モネが「エトルタの断崖」を描いている。
すでに　フランスを離れ、ベルギー一泊後　オランダに滞在中だ。

ニュースレター14、6 月 5 日

5 月 31 日、3 泊したデンハークを　早朝 6:15 に出航し、デンヘルダー(Den Helder)へ向かう。
お天気は良く暖かいが　風が弱く、船はのんびり漂いながら進んでいる。
私は船上で横になって　うつらうつら、ルカスは船室にいる。
因みに　船はオートパイロット(自動操縦)で　勝手に走ってくれる。
誰かが船縁を　トントンする音で目が覚め　見渡すと、　我々の船に横付けしたゴムボートの二人連れだ。
警察官のユニホームで　不審者でないのは歴然としている。ピストルも手錠も腰にぶら下がっている。
何事かと　少々驚くが　二人とも　にこやかに　「船のペーパー(契約書など)を確認したいのだが　なかにはいっていい？」
一人が　船内に。
ボートに残ったもう一人に、「すべての船を　検査するの？」と聞くと　「ほとんど全部。」とは言え　シーズンオフの現在　あたりに他のヨットはいないが。
「難民船を見つけることも。」
ああ、そういう事か、やはり　北海と言えども　大西洋には続いているのだから、その必要があるのだ。
「寝てるところ起こしてごめんね。」と言われ、「いえいえ、早朝　出発したから。」と言い訳。
「ゴムボートで　見回り？」　「いや、あそこの船から来た。」指差す先には　結構大きなマリーン・ポリースの船が見える。
後で　ルカスが、「すごく細かく書類を見て　全部　写真に撮っていた。」と。
それもそうだろう。こんな良い天気の日に　ボートに乗っているのだから、仕事をしたという証明がきっちりあるほうが　もちろん良いに決まっている。

ニュースレター15、6 月 7 日

赤色の岩盤の崖が見えてくる。
昨日　ヘルゴランド(Helgoland)島に、到着した。
ここは　1 平方キロメーターと　0､7 平方キロメーターの二つの島からなっている。
皇居が 1.4 平方キロメーターだそうだから　やはり、大きくはない。
この二つは 1720 年までは砂州で陸続きだったが、暴風雨で分裂されてしまった。
ドイツ北西部の海岸線から 70 キロメーター沖合に位置している。
人口は 1000 人。
歴史的にはもちろんいろいろあり、イギリス領だったことも、第二次世界大戦の折は　爆撃でロブスターが激滅したとか、戦後は無人島になったとか、、、、。
2 月の平均気温 6.2 度と　ドイツで一番暖かいところだそう。
それもあってか　人気の休暇場所となっている。
旅行者向けにたばこ、アルコール飲料及び香水が免税されており、島のメインストリートはそういう店やレストランで賑わっている。
昨夜からの暴風雨で　ヨット内に閉じこもったまま　のんびり過ごしている。

ニュースレター16、6 月 19 日

キール運河を通過し、北海からバルト海に入った。
北海の風の冷たさにうんざり気味だったので　ここの暖かさが本当に嬉しい。
12 日、キールを発ち、Arnis へ向かう。
Arnis の小さな港にこだわったのは　「MAYONA」のためだ。
35 年前、ルカスとの初めて長期休暇は　MAYONA でのセーリングだった。
ギリシャで過ごした 2 週間が　この後の私の『運命』を決めたようなものだ。
この旅で　私がセーリングに合わなければ　早めに関係を断つというのが　ルカスの本音だったのだ。
幸いにも(ルカスにとって！)、船酔いもほとんどなく、6 人での共同生活も滞りなく、素敵な初体験だった。
1988 年には　1 ヶ月のセーリング、その後も子供たち二人を連れての夏休暇と、MAYONA での体験は　大事な人生の思い出だ。
我々の船の名前「MAYONA ll」は　その思いを込めている。
「MAYONA」のその後は　20 年前ほどか、オーナーがドイツ人に売却し、行方は知れなかったが、去年　ルカスがいろいろ検索した結果、Google maps で　この船を見つけたのだ。
今もそこにあるかどうかは不明だったが　とにかく行ってみたところが　Arnis なのだ。
そして　本当に　思い出の「MAYONA」はそこにあった。
カバーがかけられ、持ち主はいなかったが、懐かしい姿が。
思い出の中ではもっと大きかったような気がしたが、記憶は曖昧なものだ。
と、感傷に耽っている間も無く、ルカス家族から　義理両親の部屋が上階からの水漏れで大変なことになっているという連絡が入り、あたふた。
アペリティフで乾杯の予定もあったものじゃない。
因みに　この日は私の誕生日だった。

ニュースレター17、6 月 21 日

　夏至の今日 6 月 21 日は　久々に朝から晴天、停泊している港から徒歩で、「ルイジアナ近代美術館（LOUISIANA MUSEUM OF MODERN ART）」に行く。

このヴィラの所有者であった貴族の Alexander Brun(1814-93)の 3 人の妻の名が　”Louise”（ルイーズ）だったところからの命名だ。冗談のようだが、創設者の Knud W. Jensen(1916-2000)は、1958 年にこの名前を引き継ぎ　美術館として改装した。

日本の木造建築の影響を受けたという新館は　自然の中に無理なく存在している。

受付を通って庭に向かうと　正面に　ヘンリー・ムーアの彫刻を挟み　青い海が広がっている。対岸のスェーデンも臨める。

自然に負けていない彫刻の凄さ、さすがだ。

庭園中に　様々な彫刻やモビールが、緯度の高いここ北欧特有の透き通った光に映えている。

草間彌生のインスタレーション「Gleaming Lights of the Souls」は、壁と天井は鏡で覆われていて、床は反射用の水たまりになっている。天井からは 100 個のランプがぶら下がっていて、色が変化していく。狂気はここにも。

見甲斐のある作品が屋外、屋内と　飽きることなく鑑賞できる。

海を見渡せるテラスにあるカフェでの昼食は　おしゃれで　『ヒュッゲ』感たっぷりだ。

11 時の開館とともに入場し、3 時半過ぎだが　午後のお茶を楽しんでいる。

ニュースレター18、7 月 2 日

6 月 28 日に　二日間いたスウェーデンの Ystad から　またデンマークのボーンホルム島（Bornholm)へ向かう。
因みに Ystad は　スウェーデン最南端の街で　テレビドラマ『刑事ヴァランダー』(Wallander)の撮影場所となったところだ。良いドラマだったが　やたら暗くて寒々とした風景が印象に残っている。
夏日に訪れた街は　薔薇の花の咲き乱れる可愛らしいところだった。

コペンハーゲンからよりも　スウェーデンにずっと近くボーンホルム島は位置する。
バルト海の宝石、オストゼーの真珠と呼ばれるボーンホルム島は　淡路島くらいの大きさだ。
我々の停泊した港から　徒歩 20 分程で　Hammershus 城跡へ。
昨日は曇り空で　いつ雨になるかと　急足で丘を登った。
夜中の嵐の後の　素晴らしい晴天のもと、今日も城跡へ散歩した。
広々とした海の眺めと　緑の中の廃墟は良いコントラストだ。

昔は漁業で栄えていたようで　燻製のための煙突を備えた建物が　あちこちに見られる。
昨夜の夕飯は　燻製品、酢漬けなどの魚　食べ放題というレストランで　いろいろ口にした。
子供たちの夏休みも始まった今、島は　デンマーク人の観光客で賑わっている

ニュースレター19、 7 月 6 日

夏は祭りだ。
コペンハーゲンに到着したのは 6 月 23 日だった。
全く予期していなかったが　この日は夏至祭(Sankthansaften)だった。
デンマークではヴァイキングの時代から　夏至の夜に「魔」が活発になると信じられており、この日に　魔女を燃やす(魔女狩り)の習慣ができたとされている。

停泊した港の岸近くに、薪の山が用意された。
夜　10 時頃　点火され、嫌なことを紙に書いて一緒に燃やすのだそう。
隣の船の人が　親切に教えてくれる。
港がどんどん船でいっぱいになってくる。カヌーの団体も。
沿岸はぎっしり人が集まっている。
10 時になってもまだ明るいが、音楽とともに催しが始まり、火が点けられ、夏を思いっきり楽しむ人々の喜びがヒシヒシと感じられる。
陽が落ちると急激に寒くなる。夜中まで大騒ぎかなと思っていたが　結構早々と人々は去って行った。
.

ニュースレター20、7 月 8 日

7 月 3 日、デンマークの最東にある小さな小さな島に到着する。
コペンハーゲンで知り合ったトビアスが　行く価値ありと勧めてくれたところだ。
二つの島 Chtistiansø と Frederiksø は吊り橋で繋がっている。必要あれば　橋は真ん中で開いて船の運行が可能だ。　二つ合わせて　Ertholmene(えんどう豆島)とも呼ばれている。

Chtistiansø は　長さ 710 メートル、幅 430 メートル
Frederiksø は　長さ 420 メートル、幅 300 メートル
定住者 90 人の本当に小さなこの島に　年間 4 万人の観光客が訪れる。
ゲストハウスが一つとキャンプ場が一つある。
生徒 15 人の小学校もある。

港に入ると　1800 年築の大きな円形の塔が眼前に。元は灯台だが　今は博物館でいろいろ催しされているらしい。

隣の船の人が　今夜はコンサートがあると教えてくれる。
Stepfan Brandt は　デンマークでは有名な歌手のようで　バンドと一緒に　年に一度ここで　コンサートを催すそう。
我々は全く知らずに　この日に。どうも　港も船でいっぱいなわけだ。我々の船は岸から 3 隻目の船に横付けしてある。後で 5 隻目に挟まれた。
一つだけあるレストランで　食事したが、おしゃれで　嬉しい驚きだった。
食後　コンサート会場へ、とは言っても小さな建物の中で　既に人はいっぱい、外の芝生に家族連れも皆、ビール片手に座り込んでいる。ほとんどの観客は　フェリーで Bornholm 島から来て　そこへ帰る。
歌は当然　デンマーク語だが　とってもノリ良く、十分楽しめる。
寒さ対策していなかったので　陽が落ちる頃　急いで船に戻った。
あっという間にひと回りできる島だが　印象に残るところだった。

ニュースレター21、

7月14日、子供達(夏緒、夏緒のパートナー　クリストフ、真悟)が、ストックホルムに到着した。
残念ながら、天気はまあまあだが　気温が低く寒い。一時　暖かい中　セーリングをしていたので　寒さの再来は　なかなかきつい。
が、家族でのセーリングは　やはりうれしい。
日に3度の5人分の食事の支度は　大仕事、事前の買い物も半端でなかった。
増してや　クリストフはビーガンなのだ。
お好み焼き、焼きそば、ラーメン、生春巻きと、子供等の好きな和食を用意する。
島から島へのセーリングで　港に入らないため　追加の買い物もできず、水の節約にも細心の注意が必要だ。450リットルのタンクの水を大事に使う。
一応、海水から真水を作る機械はあるが、まだ使用していない。
毎晩　食事後は　ゲーム大会だ。その時　供するクッキーの量がまた半端でない。
セーリング4日目の今日、まだ尽きない食糧に　安堵している。
アンカーを降ろしての停泊は、ゴムボートの手漕ぎで　島に上がる。
島には　自由に使用できるサウナが備わっているところもある。
男性陣が　楽しくサウナで過ごしたようだ。ここのサウナは　皆　水着を着ているそうで、それを聞いて　次回は　私も参加しようと思っている。
島を巡って　別ルートで　ストックホルムに戻る予定だ。
1週間は　本当に短い。

ニュースレター22、7 月 28 日

ストックホルムから 20km 離れた橋で繋がれている島に、Artipelag がある。
自然の中にあるアートギャラリーだ。
そこに付属する桟橋に船を着ける。

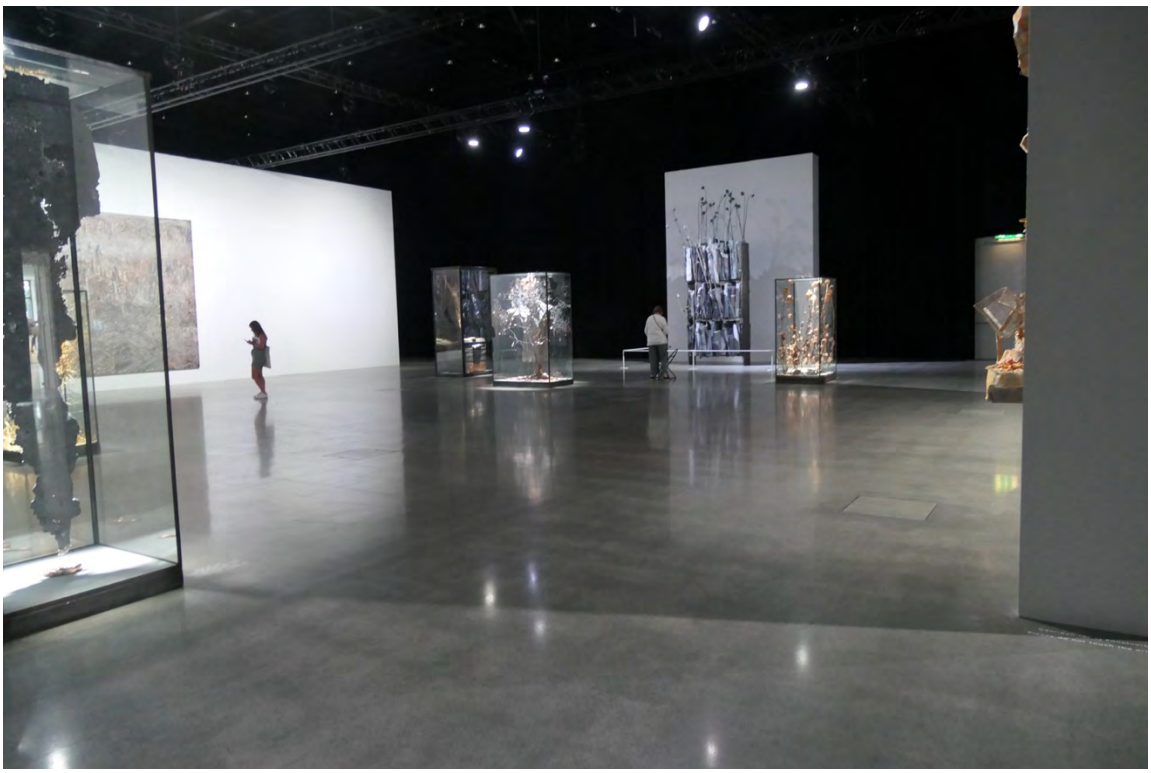
岸壁の岩を覆う松林の中に　ひっそりと、実際はかなり大きな美術館が存在する。
2012 年オープン、創設者は　Björn Jakobson、世界中で有名なベビー用品のメーカー BabyBjörn だ。(赤ちゃん用旅行ベッド、抱っこ紐等)

今　催されているのは　戦後のドイツ美術界で重要な役割を果たしている Anselm Kiefer の作品だ。
大きな絵画、オブジェが　ゆったりと　巨大な空間に設置され、床から天井までのガラス窓の外は　外界の自然、空、海が共存している。

灰は物質の最後の姿だが、それを最初に用いて新しいもの(絵画)を創造する。
全体に暗いイメージの作品だが、迫力がある。
閉館間際、一つの部屋で全く私一人だけが観覧していたが、不思議な静けさの中、幸せな時間だった。

併設のレストランが　素敵だった。
屋外テラスで　外に設置されたオブジェを眺めながら。
敷地内には　散歩道に沿って　いろんなオブジェが見られる。

ゆっくり散歩し、船に戻る。
島を眺めながら　ピアノを弾く。



ニュースレター23、8 月 71 日

スウェーデンには 25 平方メートルを超える島が 22 万 1800 個あるという。
セーリング中、つくづく島の多さを実感する。
GPS で常に確認しなければ　水面下の岩にぶつかってしまう。
この多数の小島がある理由は、氷河による削り残しによって無数のデコボコが出現したのが 1 つと、地球が温かくなるにつれて、この分厚い氷河は溶けだし、押さえつけられていた地殻が「跳ね返り」(静水圧平衡)を起こしたためだ。
その小さな島々に　1 軒とか 2、3 軒とか可愛らしい赤茶色の家が建っており、水際にサウナ小屋が必ずある。
スウェーデン人が夏休暇に過ごすサマーハウスだ。
食料品をオーダーすると届けてくれるボートサービスもある。ボートアイスクリーム屋さんも。
島々にはもちろん名がついているが、なんともややこしい綴りで　スウェーデン語の難しさに困惑する。
コミュニケーションは誰もが完璧な英語を話し、まったく問題ない。
夏は 2 ヶ月だけだ。この時期を目一杯楽しんでいるのが本当によくわかる。
皆、嬉しくて楽しくて、そして　他人にも親切になる。
冬場というか、この夏 2 ヶ月以外の生活に　ちょっと想像がつきにくい。
冬にここに来ることはないだろうし。

ニュースレター24、8 月 8 日

7 月 25 日、目的地の島に到着間際、帆を下ろし、エンジンをかける。
が、かからない。いろいろやってみたが　かからない。
エンジンがかからないことには　アンカー場所の入江に入ることができない。
狭い岩場を通らねばならないのだ。

船には前日から　ベニーが同乗している。

無線 16 番で　近くの船舶に　助けを求める。
一隻のモーターボートが我々の方に向かって走ってくる。心配そうにヨットも近くに来てくれる。
モーターボートの若者二人組は　気さくに　状況を理解してくれ、船に横付けで入江まで引導してくれた。ボート上の大型冷蔵庫に　カラフルな野菜などがプリントされている。島々へ食料品を運ぶフードデリバリーのモーターボートだった。
無事　アンカーを降ろして　一息つく。
すでに　夕方、修理は翌日の朝だ。
キノコとアスパラガスのリゾット、まだ残っているボルドーワインを開け「すべては明日」と就寝する。
翌日　ルカスが知り合いのエンジン専門家や友達に電話し、解決策を伝授してもらう。
エンジンのフィルター交換を終えるが　稼働不可。
修理のための不足の工具を　近くのヨットの人に借りる。その人からの情報でエンジン専門家のアドレス得る。
その修理屋さんのいる場所は 12 マイル先、まずはアンカー場所にいた家族連れのモーターボートに引っ張ってもらい、その後　帆を上げ港に向かう。
こんな時に　なんと天気は素晴らしく　風は最高で、それは救いだったが、やはりつらい。
その港の近くまでは走ったが、あと少しのところで　とうとう適切な風が得られず、仕方なくアンカーを下ろす。
修理屋さん　トーマスに連絡すると、引導に行くが　ボートを調達するのに時間がかかるため待っていてくれと。
彼を待つこと 1 時間、小さなモーターボートの二人組が　無事小さな波止場に誘導してくれた。目的の港までは遠すぎた。不安ながらもしっかり、料理し、美味しく食する。
翌日　8:45 エンジン専門家が来る。
あれやこれやで昨日のトーマスもやってくる。
詳細は私には理解できないが　船外で待っている時、エンジンの音が！
生還、どうなることかと少々暗澹としていたが。

12:15 出航、これでベニーを彼の妻が待つ別の島に送り届けることができる。

これからまたどんな困難に見舞われるか、覚悟せねば。

ニュースレター25、8 月 9 日

8 月 1 日
Åland オーランド諸島、Käringsund 島に到着する。
スウェーデンの島から 30 マイル程の島だ。

距離的にはスウェーデンに少しだけ近いが　フィンランドの自治領だ。

主言語はスウェーデン語、もちろん　フィンランド語を話す人は大勢いる。
貨幣は　ユーロ。
今年はロシアからの独立 100 年を祝っている。

レストランで　女主人に今日はスイスの建国記念日と伝えると、「あら、友達の息子も今日 5 歳の誕生日を祝っているわ。」と紹介される。一緒に「ハッピー　バースデー」唱和。
事前に船上で　ユルゲンの焼いてくれたツォップ(スイスの三つ編みパン)と　ワインで乾杯した。

ユルゲン、パトリチア夫妻は　元々はドイツ人だがスイスに帰化している。
純粋スイス人はルカスのみだが、お祝い事は良い事だ。

隣に停泊している船が臭い。窓ガラスも割られている。
聞けば　２日前に　エンジントラブルで炎上したようだ。
やれやれ、こういうことも起きるのだ。

1 週間ほどオーランド諸島を巡り　フィンランドへ向かう予定だ。

ニュースレター26、8 月 15 日

ヨット生活での料理は　オーブン付きガスレンジを使用する。
キャンピング用のガスボンベは常時　二つ所持している。
一つが空になれば　次の港で補給する。
ガスオーブンは使用したことがなく、勝手がかなり違うので　未使用だった。
7 月末から同乗しているユルゲンが、「パン焼きは得意！」と　焼いてくれることになった。
材料はいつでも焼ける様　すべて用意してある。
手際良く　スイスの三つ編みパン、ツォップを なんとも簡単に焼いてくれた。
当然ながら　焼きたてパンは　ほんのり暖かく、赤ワインのお供にもピッタリ。
8 月 1 日のスイス建国記念日も　このスイスパンで　めでたく祝うことができた。
要領もわかったことで　今後は　パン不足の心配はなくなった。

ニュースレター27、

8 月 13 日、オーランドから　スウェーデンの Fejan 島に到着する。
食糧も尽きてきたので　レストランへ行くことに。
が、この島に一つだけあるレストランは　この日が最終日で、材料の関係で予約が受けられないとのことだった。
ルカスが　ネバリにネバって　とうとう　早めの時間に食事可能になった。
テラスの広い、眺めの良いところだ。
サーモンの刺身が前菜にある。
同乗者の被っているテニスのフェデラーのキャップに反応して、サービスの女性が　「フェデラーのファン！」だと喜んでいる。
若い男性の給仕人と小話中、私が日本人だというと、「ぼくは　日本語を一年　勉強しました。」と、これにはびっくり。
この 21 歳のマークは一度　日本へ行ったことがあり、ジブリの映画ファンとのこと。
たった一年の独学の割に　本当に上手に日本語を話す。
夏の間の仕事が終わり、秋からはデンマークで建築の大学へ進学とのことだった。
美味しいディナーを楽しんだが、ワイン、その税金の高さに　驚く。

食後　港にあるサウナへ。
眼前の海と島を眺めながら　吹き出す汗が気持ち良い。
当然、海に入り　熱を冷ます。

夜中過ぎ、ディスコ音楽全開、おそらくレストラン最終日の催しだろう。
睡眠不足は免れない。

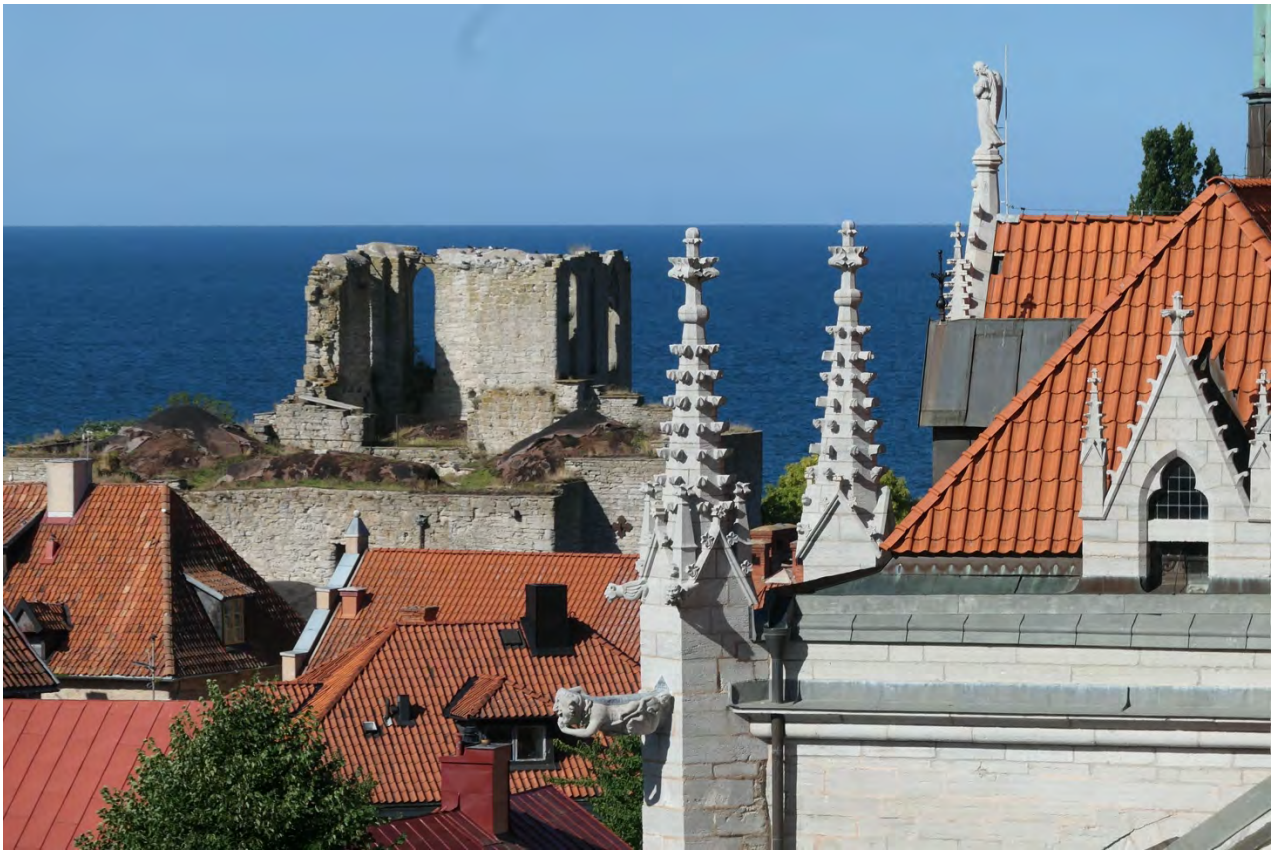
ニュースレター28、8 月 22 日

8 月 21 日、Ankarudden(Nynäshamn 島)を朝 5 時に発ち、15 時間(4 時間エンジンを掛け)かけて、ゴットランド島 Gotlando、ヴィスビーVisby に到着した。
宮崎駿のアニメ映画『魔女の宅急便』のモデルとなった街だ。

夜 8 時過ぎの到着後、即　港のレストランへ向かう。
まだ暖かく、テラス席に着く。
隣のテーブルの人たちが　やけに嬉しそうに歌まで歌って騒いでいるので　ウェイターに尋ねると、島での仕事最終日の打ち上げをやっているとのこと、ここもハヤ夏シーズンは終わったのだ。
ゴットランドの地ビール、苦味が強くおいしい。

翌日、散歩に出かける。

ヴィスビーは、12〜13 世紀にハンザ同盟の貿易港として栄えたところで、旧市街はユネスコ世界文化遺産に登録されており「薔薇と教会廃墟の町」とも呼ばれている。
3.44 ㎞にわたるヴィスビーの輪壁は　最古は 1150 年代に、他の部分は 1200 年代に建設されている。
可愛らしい街並み、さすがスウェーデン　おしゃれなお店も多い。
小道をたどりサンタ・マリア大聖堂へ、小高い丘からは、海へ繋がる街が一望できる。
キキが飛び回った赤茶色の屋根、廃墟の教会、まだ、木々は青々として　すべてが　青空と海に映えている。



ニュースレター29、8 月 28 日

8 月 18 日、ストックホルムに到着したラウルとマーグリットと共に　午後 4 時頃、
The art gallery Artipelag (美術館)のある島へ向かう。
ここへは一度　来ているが　素敵な空間、静かな桟橋、ストックホルムから船で 2 時間という手軽さもあり、再度訪れた。
夕方　6 時過ぎに到着、閉館されているはずの美術館に　人影が。
聞けば、6 時半からコンサートが催されるとのこと。

スウェーデンの最強ジャズボーカリストの 1 人と言われているイザベラ・グンヒルド・ヘレン・ラングレン（Isabella Gunhild Helén Lundgren)のコンサートだ。

ロマンチックなバイオリンの旋律、ジャッジーなピアノが追い、コントラバスの低い音が　お腹に響き、ドラムがリズムを引き継ぐ。
アルトな歌声、心地よい柔らかさと静謐。
背景は　松林と空と海。
「風に吹かれて」から始まり　「Forever Young 」で　終わる。
ボブ　ディランのジャズアレンジだ。

34 歳の彼女は　18 歳からニューヨークで勉強、音楽活動をしていたが、2010 年に　ストックホルムに戻り、進学を学んでいる。
深みのある声に　精神的な何かがあるような。

コンサート終了後もまだ明るい島を散歩する。

ニュースレター30、8 月 31 日

前日(8 月 29 日)スウェーデンから　ドイツ最大の島 Rügen リューゲンの Lohme に到着した。
朝食後、ユネスコ世界遺産の　Nationalpark Jasmund ヤスムント国立公園を散歩する。
13 世紀以降に形成されたヨーロッパブナ林、高くそびえた木々はまだ青々と葉を茂らせており、左手の海岸線に波が打ち寄せる響きが心地よい。
4km ほど歩いた先は「Königsstuhl」(王座)と呼ばれる全長 10km、高さ約 117m にもなる白亜の崖が見られる。
さすがにここは旅行客が大勢で　少々白ける。

その後、Prora プローラへ向かう。
ここリューゲン島はナチス（国家社会主義ドイツ労働者党）が計画した保養所・海水浴場の場所だ。
世界最大の空き家と称された建物の現在を見たいためにやってきた。

一棟 500m の長さのビルが 8 つ連なる 4.5Km に及ぶ巨大建築は、20,000 人の労働者が休暇を過ごすために計画されていたが、第二次世界大戦のため　本来の目的ではついに使用されることはなかった。
その後　軍事施設や戦災難民のために使用されたが、ドイツ再統一後は観光スポットとなっていた。

2004 年から始まった改築で　ほとんどがホテル、アパートとなっており、最後の一棟が改築中だった。

廃墟の姿は写真でしか知らないが、ヒットラーの力量の凄さが垣間見える。

図らずも　ちょうど　ドイツの警察小説を読み終えたところだった。
作者の Henrik Siebolt は　日本に 8 年間在住したことのあるジャーナリストで、「Inspekter Takeda und das doppelte Spiel」は　タケダ警視(か、警部か？)シリーズの 4 冊目だ。

ドイツの元ナチスと日本の隠れ最右翼が　ヒットラーの時代の日独の関係を懐かしみ、夢見てハンブルグでテロを計画するという、あるようなないような話だ。
なかなかスマートなタケダ警視は　ポニーテールで高級スーツに身を包み、合気道の達人、夜はジャズバーでサキソフォンを演奏するという、これは日本人警察官ではありえないかと思われる人物だ。
この巻では　ハンブルグだけでなく　相棒の女性警部と日本まで行き、ヤクザとも接する。
ちょっとやり過ぎの感はあるが、戦前、戦中の日独の関係、日本の新宗教についてなどが　かなり詳細に記されており、おもしろい。
このタケダシリーズも　船旅中　楽しんでいる読み物だ。

© Christian Helmle, White Elephants vor 2007

Umgebaute „Kasernenanlagen“ 2022

ニュースレター31、9 月 20 日

9 月 10 日　風の向きも良く、Biskaya 三日間横断の予行練習を兼ねて夜間航行することに。
海に落ちる夕日を見ながら　夕飯、が、赤い太陽は確かめられたが　海のすぐ上は雲がかかっており　完全に沈むところは見られない。
午後 8 時から　男性軍　二人が　2 時間交代で操縦に着くことに。
私は早々とベッドへ。
北風に押され、帆が風を孕ませ、ゆっくりながらも走行を続ける。
波でかなり揺れる。ゆりかごを　ゆっくり大幅にゆらせるように。
なかなか寝付けないが　うつらうつら。
夜中 2 時半ごろ、風が凪いだのか　エンジンがかかる。
5 時半ごろ　エンジンか、その辺から　おかしな音が。
順番で休んでいたルカスが飛び起きてチェックへ。
どうも思わしくないよう。
また　帆を上げて　いったんエンジンを切る。
おそらくはプロペラの不具だろうと。
その時点から　一番近い港、Scheveningen(Den Haag、オランダ)へ向かうことに。
午後 4 時くらいに　なんとか港にたどり着く。
すべては明日と、3 ヵ月前ここに来て満員で入れなかったフュージョン寿司屋へ直行する。
おいしいお寿司とお酒で　ちょっぴり　明日に希望を繋げる。
翌日、残念ながら　船を引き上げるリフトの責任者が 4 週間の休暇で留守とのこと、次の港、Ijmuiden 港へ　ゴムボートの助けをかり出発する。
Ijmuiden 港は工場地帯にあり　殺風景だ。だが、修理に必要なものは皆揃っているようで一安心する。前日注文したプロペラの部品は　Brexit にも関わらずイギリスから 24 時間以内に届いた。
13 日(月)から 16 日(木)まで　四日間　船は陸に上がった。
この間、水の使用、トイレの使用不可となる。
必要に応じて　1 キロほど歩いて港のトイレ、シャワー室に行く。
辛うじて　お湯を沸かしてコーヒーは飲める、が洗い物にはまた 1 キロ歩く。
夕飯後は　歯磨きもトイレも済ませて　船に戻り、その後　水分を取らないようにする。夜中往復 2 キロ歩く気にはなれない。
私は　洗濯くらいであとはすることがないが　ルカスとトーマス(9 月 5 日から同乗)は　プロペラ修理で手を真っ黒にしている。
偶然にもこの近くに「北海キッチン」があること判明、スイスにも配達されている北海水産の直営のレストランだ。
３日目、ここの魚づくしのおまかせメニューに、ここに来られたのも　故障のおかげだなと私は勝手に　ほくそ笑む。
16 日午後 3 時、船は海上に戻った。

ニュースレター32、10 月 2 日

9 月 27 日、スイスに戻る。
船は　シェルブール Cherbourg で冬を越す。
あのミュージカル映画「シェルブールの雨傘」の舞台となった街だ。
6 ヵ月間、9 カ国、ほぼ 4000 海里を　航海した。
この期間　同乗してくれた友達、家族は 15 名に及ぶ。
自宅で好きな時に　快適な温度のたっぷりのお湯でシャワーできるありがたさ、心底　うれしい。
船にもシャワーはあるが　タンクの水量に限りがあるので、港に着いた時　そこのシャワーを使用する。港によって様々な共同シャワーだが、シャワーが使用できることが幸運、と文句は言えない。
電力も　港でケーブルを繋いだ時にしか　十分に供給できない。

水も電気も　節約に徹する。
洗濯機が使用できる港も限られており、その洗濯機の操作がこれまた様々だ。
スウェーデン語やフィンランド語で書かれている使用法には　適当にボタンを押して　作動させる。
間違った温度で設定して　大事なジャケットがボロボロになったこともある。
自宅で何より嬉しいのが　料理をすることだ。
船上での限りある材料と器具で料理するのは苦ではないが　限界がある。
買い物も　スーパーがどこにでもあるわけではないのだから。
ほぼ 110 ヵ所の　港、湾で停泊した。
これから　おそらく半年は　楽な生活を送る事ができる。
が、まだまだ海の魅力は尽きない。半年後の再出航が楽しみだ。

ニュースレター33、1 月 28 日

2023 年もめでたく明け、雪山の景色も堪能している。が、海が恋しく　うずうずしている。
　この 4 ヶ月の地上生活、ここでの重要年中行事クリスマスも無事終え、家族再会も楽しんでいる。

孫の成長にも目を見張っているが、たいした義務も責任もないのが　本当にありがたい。

　5月からの再出航に備え、いろいろ準備している。
シェルブールに置いてある船は　修理やらペンキ塗りやらで　人手に任せているが、やはり順当とは言い難い。
どうも　我々の船、アルミニウム材に不適当なペンキを使用されたようで、やり直しのための工程や、保険支払いについてなど　面倒なやり取りが続いている。
とは言え、すべてルカスがやっていることなので　ちょっとした愚痴をきくだけが私の役目だ。

　今(2023年1月21日～29日)ドイツのデュッセルドルフではヨーロッパ最大の　国際ボートショーが開催されている。何隻ものヨット、ボート、設備、材料関係　全てが展示されている。
　Mayonaに必要な機具の調達のため　2泊3日で行ってきた。
　ドイツ最大の日本人街で有名な都市だ。和食の食材も豊富と聞いており、ほとんど空のスーツケースで片道7時間の電車の旅を楽しむ。
二日間の夕飯のためのレストランは事前にしっかりリサーチし、和食のみだ。
　広大な展示場は　すべて見切れない。なぜか　ナイフ類を扱うところで　日本の包丁があり、ちょうど欲しかったので購入した。
　冷かしで　何隻か船内も見学してみた。中古の船ばかり見てきた私には　新品の船は眩いばかり、パーティー目的の船も多いのだ。
見学後　くたくただったが、スイスではなかなか食せない豊富な和食に疲れも吹っ飛んだ。もちろん　日本酒のお供で。

　前回のセーリングで　寒さ対策の必要性をひしひし感じていたので、すでに　メリノウールの下着は調達した。
新たにキャンプ用のコーヒー湧かし、オーブンを使わないパン焼き器(ガスレンジ用)等々、そろえている。

　5月からは　イギリス、スコットランドへ向かう予定だ。